

日頃の妄想を処理するSS集

柴犬の帝王

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

飽和したアイデアを溶かして攪拌その残留物が恥辱的なこのSS集。

プロットもクソもない日常で思いついた妄想を納得できる方法で形にしてやろうと思つてこのSSを作りました。なので100%自分の妄想と好みでできています。ご高覧なさる方は「あ、これダメだわ」となった場合ブラウザバックを推奨します。

批評されても多分文章直らないので諦めて、どうぞ。

必須タグは保険で粗方付けときます。

あと妄想を長く続けるために当たり前のように投稿後の話を改稿するので気付いたら話が大きく書き換わったりして。

最後に、このSSはほのぼのの系です（大嘘……かどうか微妙なライン）。

目次

ポケモンを貰った転生者（ポケモンの世界とは言っていない。でも当然のようにチートである）

プロローグとはつまり転生者が自分の状況を確認するか神様と話す体で能力をひけらかすための時間である（例外あり）—— 1

これはつまり、ここから始まるストーリーがあるということだと、俺はそう思う。じゃないと話広げようくない？ —— 5

ポケモンを貰った転生者（ポケモンの世界とは言っていない。でも当然のようにチートである）
プロローグとはつまり転生者が自分の状況を確認するか神様と話す体で能力をひけらかすための時間である（例外あり）

「ぐるあー！」

「あはは、くすぐったいぜリーザ、尻尾の火が俺の肌焼いてるんだけどあちいってば」

「うらら〜」

「お、モリガン、どうした、腹が減ったのか？ ああ、遊びたいのか……オーラぐるまを構えるなよ冗談が過ぎる——危ねえ!？」

「ギョツギョツー！」

「お前は当たり前のように噛みつくね？ いや耐えられてる俺の体もおかしいけどや」

『わたしの愛を受け取ってください!!』

『あつ、ずるい……私も』

「おうお前らはまだ可愛いなア!! でも波導とだいまんじぶつけるのやめてもらっていいですかねエー！」

やあ、俺の名前は織守冬馬。おりしゆとうま

みんなからはトウマと呼ばれているよ！ ……呼ばれてねーよぼっちだもん。

そんな俺の職業は……じゃじゃん！ ポケモントレーナー！ いや待って、その『何言ってるんだこいつ』やめて？ 画面の向こうでどうせ顔顰めてんだろ？ 俺だってこんなこと言いたくないさ！ とうか本当にどうなってんだ!! 俺はこんな特殊な夢を見たこと、今まで一度もねえし……夢にしてはリアルすぎる。明晰夢ならこんなに痛みを感じれば飛び起きるはずだ。とうか今起きたばかりだし……。

や、マジでこれなんなの。俺さつき起きたばっかりなんだが？ いつも通り予算切り詰めてるせいですうっとペチャンコのままのお布団で寝てたんですけど？ いつもならジリリリリ！なんてけたたましく鳴く目覚ましに叩き起こされてるのに、今日はモルペコのたいあたりがモーニングコールだし……。

……と、いうか、さつきからポケモンたちが次々俺に抱きついてる。

多分、こいつらはゲームの中の俺の手持ちとかだろう。うん。でもそうだとしたら——、

「なつき度どうなってんだア……？」

『すきっ！ だいすきですう!!』

ルカリオに体の中に思いつきり波導を流されながら困惑する。

こいつはわかる。だって進化条件に『なつき度』が入っているから。……でも他の奴は連れ回した覚えもないんだが。

『くんくん……』

「いやほんとおかしいよなつき度。なんでルカリオが人の匂い嗅ぐのん……。もつときあ、高潔な戦士って感じだろお前よオ」

腕を背中に回しているルカリオ。

こうしている間にも俺は波導を流されているのだ。100Lvの放つ波導は痛い。きつと大岩を砕くような『はどうだん』が撃てることだろう。痛い。

とりあえず、だ。

なににせよこの不思議体験は世界にどこまでの変化を引き起こしたのか、それを確認すべきだろう。

もしかしたら俺の家の中でだけ、こうなっているのかもしれないし。

少し現状への不安を滲ませながら、寝床から移動し、リビングのテレビをつける。ちなみにここまでの動きをポケモンに体ぶつ壊されかけながら行なっている。俺ってばマジ頑丈。

『——では、次のニュースです。今日未明、〇〇県針田市でクマの目撃情報がありました』

「おお……特に何も起きてないんだな……。というかようやく普通の世界を感じて感動してる自分がいるぜエ……」

『へろへろ』

「おうルカリオちゃん、今日比較的寝汗かいた方だからあんまり舐めねえほうがいいぞオ」

『なにいつてるの！ それがいいんだよ！』

俺の首筋を舐めるルカリオはもはや手遅れだったらしい。あちやー、と顔に手を置いて天井を仰ぐ。

耳から入るニュース番組の内容からするに、どうやらこいつら……『ポケモン』はニュースにはなっていない。ということはいまだに一般人に見つかっていないか、ここにいる奴らしか存在していないってことになる。

……あと、限りなく低い可能性で、『一般人には認識できないがなんらかの才覚を持ち合わせると認識ができるようになる』パターンだ。「……ゲー○フリークとかニンテ○ンドーはそのまんまなのなア。じゃあ世界が書き換わったわけじゃあねえのか」

スマホの画面には、はつきりそれらの名前が書いてある。

気になって調べてみたが、それらははっきり存在しているらしい。うーん。限りなく低い可能性が真実味を帯びてきたぞ〜？

「……あん？ メールウ？」

ピコンツという音とともに画面には『神様』からのメールが届いた。そもそも俺はメールアプリの通知を切っているはずだし、ふざけてメールを送ってくるやつも知らない。だってぼっちだもの。

通知をタップし、文面を開く。

「拝啓

春爛漫の季節を迎え、冬馬様もより一層の繁栄をなさっていること、心よりお喜び申し上げます。神様です。

冬馬様を転生させてから二時間は経過したかと思えます。どうでしょう、新しい環境にはもう慣れましたか？ 少なくともご自身でお選びになった特典ですので不平不満が溜まることはないことと存じます。

今回のメールを出すことになった背景としましては、冬馬様が転生の砌、恐らくですが転生関連の一切を脳が夢と認識し、自動的に忘却しているのではという危惧と、それに対し一応の打開策を打ち出そうという、実に手前勝手な老婆心からでございます。この書面はこれにて終わりとなりますが、のちに送られてくるメールには特典とこままでの経緯が全て書き表されておりますので、どうかそれを読んでこの世界を楽しんでくださいませ。

まずは、僭越ながら書中をもちまして冬馬様のますますの繁栄を祈らせていただきました。花冷えの頃は体調を崩しやすいものです、どうぞご自愛のほどを。

敬具」

「……………丁寧にもオ……………」

あれ。

転生ものの神様ってこんなに親切だったっけ？

ううん……………なんだろう。一気に脱力してしまった。

今まで謎しかなかったから、どうにか解明しようと少し力んでいたが、一気にその力が抜けて、へなあつとなった。

まあ、でも。

「バイト入れてなくてよかったなあ……………」

すでに午後一時を回っている時計の針を見て、ため息をついた。

なお、この頃には全身に電気と炎と波導が回って、謎の筋肉痛に襲われていたことを明記しておく。

これはつまり、ここから始まるストーリーがあるということだと、俺はそう思う。じゃないと話広げようがない？

か、体が痛え……!!

メールに書いてある通り二時間前に起きていたらしい俺は、考えてみればその間ずっとポケモンの攻撃を流されているわけである。

つまり波導が流れている。炎で炙られている。電気で痺れている。

これがつまりどういうことかというのと、謎エネルギーで全身に内側から破裂するかもしれないようなマツサージを受けながら、電気マツサージも同時に施され、さらには炎で無理やり代謝をあげられているということ。一般人なら既に千回を超える回数死んでる。俺にはわかるんだ。じゃあ俺はなんなんだよ。

「ほら、もう離れてくれ。そろそろキツイ」

『やだ！ やだ！』

「だーめ。つーかそろそろ昼飯にしてえんだよオ」

うう、それなら……と、ルカリオは引き下がった。

やったぞ……我々の勝利だ！

『むう……じゃあ夜寝るときね！』

「神は死んだア!!」

きつと死因は飼い犬に手を噛まれただろう。ルカリオって犬顔だし。

はあ……今から夜に向けて気が重い……明日死んでるでしょこれ。筋肉痛と沈んだ気分のせいで重い体を引き摺りながら台所へ向かう。

「なんにするかな……」

冷蔵庫の中身を見つめながら、昼飯の献立を考えていく。

なにがあるか、なにが作れるか、バランスはどうか……。

あっそうだ。どうせならポケモンに聞いてみよう。今のところ六匹しかいないからな。食いたいものくらい聞こう。

とらう(こ)とで聞きに行った。

「なあ。お前らは何が食いたい?」

「ぐるお? ぐるるお!!」

「うららら〜」

「ギョツ……ギョギョツ」

「…………ぬめっ!」

「ああごめんなア。よく考えたらルカリオとシャンデラしか喋んねえわ……」

失念していた。

そらそうだ、そりゃあネズミやらトカゲやらに食いたいもの尋ねても理解できるわけないわな。や、多分あつちは理解してるんだろうけどね、俺はヒアリングできないからさ。ポケモン語。

「つてことでルカリオ、シャンデラ、リクエストあるかア?」

「うくん、……あれだね」

「うん、あれがいい」

「アレってなんだ」

『あの、たぶたぶしてて茶色いやつ!』

「たぶたぶ? 茶色い?」

『それで、いろんなものが入ってる。沢山。人参とか、じゃがいもとか』

『ライスにかけて食べるの!』

たぶたぶ。茶色い。人参。じゃがいも。

あー、あれね。ポケモン最新作のキャンプで作れるやつ。

「カレーかア?」

『うん! あれ美味しかったの!』

『おねがい。ダメ?』

「いいよ。そんなぐらい作ってあげる。待つてろよオ、お前らが食ったことねえくらい旨えの作ってやつから」

『えっ! ほんと!?!』

『期待してる』

「ほんとほんと。そうだな……鶏のモモ肉のトマトカレーにする

かア」

よつし、腕によりをかけるぞー！　なんて意気込みで袖を捲ったものの、それは俺の携帯に掛かってきた電話で邪魔された。

誰だよ俺に電話掛けるやつ。普段俺が出ねえって知ってんだろ……。

「……あア？　カナ？」

乱暴にぶつちぎってやろうと取った携帯のディスプレイには数少ない友人である幼馴染みの名前が。

なにかあつたんだろうか。幼馴染みだから俺の電話嫌いを知っているはずなのに。それでも掛けてくるってことは――。

考えててもしかたないか。ポケモンに静かにするようにとジエスチャーを送ればうんうんと頷く。いい子だ。

「もしもしイ？」

『ふぐう……ぐすつ……うええ……』

「あ？　おい？　泣いてんのかオイ」

通話ボタンを押した俺の鼓膜に真つ先に届いたのは普段陽気な幼馴染みが漏らした嗚咽。

本当に何が……。

『うええ……はやく繋がってよお……うああ……』

「落ち着けエ、もう繋がってらア」

『……トウマ？』

「そうだ。お前の頼れるトウマさんだア」

できるだけ澆刺と返事をする。

ここで俺が戸惑えばカナはもつと不安になるから、だから俺の不安は隠し通さなくてはならないのだ。

というかなんで泣いてるんだろう。

『ふえええ！　怖かったよお！』

「そうかア、なんか知らんがよく頑張ったなア、偉いぞカナは」

『ふえええ！』

「よしよし」

同年代なのにまるで子供をあやしてる気分。

相当辛いことがあったに違いない。かなり溜まってるんだろう、恐怖が。

電話だけでここまで安堵して泣くなんて……。

五分程恐怖を吐き出させると、安心したのか鼻を吸る音だけになった。よし思い切って聞こう。

「んでよオ、電話なんてかけていきなりなんなんだ？ なにがあったア……話したくねえならいいんだけどさア」

『ぐしゅっ……。話すうう……。』

「ああ、はいはい、まず鼻をかめ」

『ありがどお……。ぐじゅるる！』

「……………ミュートにしろよ」

うへえ、前世で何したら至近距離で幼馴染みの鼻かむ音聞かなきゃなんねえの……。

「落ち着いたか？ ならまずなにがあったか教えろオ」

『うん、あのね。わたしね？ 見ちゃったんだ』

「見たつて、なにを」

『わからない、でも人型の……なにか』

「そら人じゃねえのか？ 人ぐらいいんだろ、今昼間だぞオ」

『違う、違うよっ、だって家の中だよ？ おかしいよ！』

「あ？ じゃあ親御さんじゃねえのかア」

『それも無いよ！ わたしの両親、昨日から旅行中なんだよ？ あと

一週間は帰ってこないよ。メッセージアプリにも通知入ってるし』

そりや確かにありえない。

だいぶ長旅だが。でもこいつ可哀想だな……。

「お前置いてかれてるのか……っ？」

『むっ、だつてお父さんが……』お前ははしやぎすぎて恥ずかしいからダメだ』なんて言うんだもん』

「ああ……確かに」

『納得しないでよっ、もうっ』

確かにそれは置いてかれるな。

というかお前高校生にもなつてはしやぎすぎて恥ずかしいと思わ

れてるとか……。

閑話休題。

両親は昨日から旅行であり、旅行先にも既に到着したと通知が届いていて、そう考えれば早くても帰宅は今日の夜か……。

ならその人型はなんなんだろう。

「で、なに？ その人型が怖かったお前は閉じ籠って泣き腫らしてんのかア？」

『違うよ、まだそこじゃ泣いてなかったよ。というか早く逃げなきゃって思っつて、そんなこと考える余裕もなかったの。それで逃げ出す時に携帯はどうか持ったけど、他は持ってなくて……』

「……………つまり今無一文じゃないのか」

『うん、携帯のキャッシュレス決済で朝ごはんは買えたよ。でもあと三食分ぐらいしかないし……どうしたらいいかな』

聞けば聞くほど可哀想。

親から旅行を止められ、財布を忘れ、寝床もない……。

泣けるぜ……。しょうがねえ！ 俺も男だ！ 一肌脱ぐしかねえ

！

「よオーし、わかった。とりあえずお前が今非常に困窮しているのが実にわかった」

『う、うん？』

「お前今どこにいるんだア」

『え、黒蛇公園……』

「待ってろよ」

『なにが？ え？』

困惑する幼馴染みをよそに、俺は電話を切る。

よっしや、目的地は黒蛇公園だぜ！